（様式９　終了時Ｃ）

評価委員会総合評価

研究課題名：集中観測等による線状降水帯の機構解明研究
評価委員
　委員長：松村崇行
　委　員：干場充之、永戸久喜、牛田信吾、山中吾郎、髙槻　靖、瀬古　弘、
　　加藤輝之、須田一人、中村雅基、吉田康弘、徳廣貴之、宮岡健吾
評価年月日：令和５年２月１０日

１．総合評価
　□　非常に優れた研究であった
　■　優れた研究であった
　□　研究を実施した意義はあった
　□　失敗であった

２．総合所見
　所内の複数の研究部、さらに気象研究所を拠点として多数の国内大学等研究機関が連携して線状降水帯を対象とした集中観測を計画して、多項目の観測の実施、解析結果を得て実態解明に資する知見の共有が図ることで、学会での多くの口頭発表につながり、各々の参加機関にもメリットが大きいことから高く評価できる。また集中観測だけでなく、過去事例や他地域の事例も可能な限り対象に加えて詳しい研究をしたこと、短期間に一定の成果を挙げることで社会的な要請に応えたこと、機構解明による知見の蓄積や予測技術向上に向けた同化実験等を実施したことも評価できる。
　一方で、あらかじめ設定した集中観測の期間と領域で典型事例の発現が乏しかった半面、観測期間領域を超えて発生した線状降水帯事例も少なくなかったことから、より機動的で適応力のある観測網の構築も今後の課題と言える。集中観測期間中の顕著現象の発生が少なかったため線状降水帯解析に結び付いた事例はまだ少なく、機構解明研究や予測精度向上は研究・開発途上と思われる。準備期間を除くと実施期間はほぼ一年であり、想定される成果も限られるものである。参加機関との個別調整や認識共有には相当の時間と労力が費やされ担当者の負担も小さくなく、他機関との連絡調整を担う体制の構築は今後の課題と言える。
　以上であるが、本研究は適切な目標設定と研究体制のもとに実施され、想定通りの成果が得られた優れた研究であったと評価する。　なお、今後の成果の活用にあたっては、以下に留意して取り組んで欲しい。
・線状降水帯の生成機構等は未解明の部分も多く、線状降水帯の機構解明と予測精度向上に向けて、他機関と連携した特別観測の実施、現象の詳細な実態把握、様々な現象や気象場の発生・形成のメカニズム解明、現状のモデルの課題を明確にして予

測技術・精度向上に向けて取り組んでいただきたい。また、より機動的で適応力のある観測網の構築も今後の課題といえる。

・計画はほぼ想定通り進められて、実施までの体制は効果的であったと思うが通常考えられないような負担があり、このような過大な負担が生じないような方法を考えていただきたい。